

現代詩 ● 佳作④

午後
煙で誰かが
くしゃみをする
明日は雨だから
急いで耕す
しまい忘れた
風がざわつく
ラジオの唄声は
吹く風に混じり
青灰色の空は
頑なな不安を
包みこむほど

たぶん

栗田 尚美 作

明日の今頃
くりた・なおみ
奈川区
生まれ。無職。横浜市神

浜中 せつお 画

第49回
神奈川新聞

文芸コンクール

作品の掲載に当たっては、原
文通りを原則としています。佳
作作品は順次掲載します。

次回は12日の予定

に、家を出て一人で暮らしている。この日は遅
きながら新年の挨拶のつもりで訪ねてきた。
ところが、いま細川家はたいへんな状況になっ
ていた。

細川家は外様ながら五十四万石の大身で、この
ときの藩主は三代目綱利、五十九歳の内熟期だった。
綱利自身は江戸常駐の定府ではなかったが、
弟を定府に置き、自身も江戸暮らしが長かった。
上屋敷よりも高輪の下屋敷を好み、ここが事実上
の細川家の本邸となっていた。

新之助は兄のところに静が嫁いできたのを機
会に、家を出て一人で暮らしている。この日は遅
きながら新年の挨拶のつもりで訪ねてきた。
ところが、いま細川家はたいへんな状況になっ
ていた。

正月十五日は、今の暦ではもう三月に入っている。
前年に閏月があり、日付の割には春が早い。
すでに夕方で、雨になっていた。新之助は下屋敷
で借りた傘をさしていた。最近國元の熊本では傘
の産業が盛んで、竹の骨組みのしっかりした傘が
作られている。

正月十五日は、今の暦ではもう三月に入っている。
前年に閏月があり、日付の割には春が早い。
すでに夕方で、雨になっていた。新之助は下屋敷
で借りた傘をさしていた。最近國元の熊本では傘
の産業が盛んで、竹の骨組みのしっかりした傘が
作られている。

新之助はその前を通り過ぎようとして、思い返
とった。「そうか。近いな。茶店か。団子も貰えるのかな」
「ええ、お持ち帰りもできますよ」

娘は、ちょっとと待つてと言いつて、家中に入つて
行つて、すぐに年配の男と出てきた。

「これはお武家様、娘がお世話になりまして、私は
お店の吉良衛と申します。これは娘の里で
いらっしゃる。お里さんか。いい名前だな。私は上新之助と
いいます」

吉良衛も笑顔になり、
「吉良衛も手早く用団子を包んで、残り物で誠に
失礼ですが、渡しました。

「いやあ、それはわるいな。そんなんもりはなか
つたが」

吉良衛も笑顔になり、
「それは重々わかつております。実はこれは私ど
もの手作りでして、米は武州、醤油は下総のもの
で、江戸の味です。この醤油には赤穂の塙が使わ
れておりましてな、なかなかの味と、まあ自分で
いうのもおかしいですが、ぜひお武家様に召し上
がっていただきたいですね」

吉良衛も笑顔になり、
「吉良衛も手早く用団子を包んで、残り物で誠に
失礼ですが、渡しました。

吉良衛も笑顔になり、
「吉良衛も手早く用団子を包んで、残り物で誠に
失礼ですが、渡しました。

吉良衛も笑顔になり、
「吉良衛も手早く用団子を包んで、残り物で誠に
失礼ですが、渡しました。

吉良衛も笑顔になり、
「吉良衛も手早く用団子を包んで、残り物で誠に
失礼ですが、渡しました。

事件があり、年が変わつて正月になつてもその興
奮は江戸の町を覆つていた。

品川宿に近い高輪の高台にある肥後熊本藩細川
家の下屋敷から、若い武士が出てきた。村上新之
助、二十歳。部屋住みで、父親と兄に顔を出して
数馬の嫁の静の三人は下屋敷の外に住むことを
許されていた。

新之助は兄のところに静が嫁いできたのを機
会に、家を出て一人で暮らしている。この日は遅
きながら新年の挨拶のつもりで訪ねてきた。
ところが、いま細川家はたいへんな状況になっ
ていた。

正月十五日は、今の暦ではもう三月に入っている。
前年に閏月があり、日付の割には春が早い。
すでに夕方で、雨になっていた。新之助は下屋敷
で借りた傘をさしていた。最近國元の熊本では傘
の産業が盛んで、竹の骨組みのしっかりした傘が
作られている。

新之助はその前を通り過ぎようとして、思い返
とった。「そうか。近いな。茶店か。団子も貰えるのかな」
「ええ、お持ち帰りもできますよ」

娘は、ちょっとと待つてと言いつて、家中に入つて
行つて、すぐに年配の男と出てきた。

「吉良衛も手早く用団子を包んで、残り物で誠に
失礼ですが、渡しました。

吉良衛も手早く用団子を包んで、残り物で誠に
失礼